

鈴鹿市の学校保健史の研究

—— 三重県学校保健活動の曙 ——

古 川 静 子

A Historical Study of School Health in Suzuka City Area : With Special Reference to the Early Period of Its Development

Shizuko FURUKAWA

1. はじめに

鈴鹿市は、三重県における学校保健活動の草分である。その隣の津市で、私は昭和27年5月、新設の東橋内中学校に養護婦として採用された。

当時、三重県は鈴鹿市立白子中学校を「学校保健の研究」実験学校¹⁾に指定し、昭和26年、および27年の2年間、「保健委員会の活動を通じて生徒の健康をどのようにして増進するか」を実験課題として、調査研究実践を続けていた。

県教育委員会技術吏員として、この学校の研究の指導に当たった坂盈氏が、女子保健学院での私の恩師であった縁で、私も津市から生徒を連れて2年間に8回もこの中学校へ保健委員会活動の見学に通った。当時の新聞の記事（別掲）にもこのことが記載されている。

白子中学校は、やがて地区内の白子高校および白子、稲生、愛宕の各小学校に呼びかけて、家庭および一般地域社会に研究実践を広げ、学校保健委員会の設置そして活動へと発展させていった。

これより先、白子中学校区内の稲生小学校では、昭和23年頃より地区全般の保健活動を高め、昭和27年には県一健康優良学校となり、日本一健康優良学校（小規模校）を目指した活動に入っていた。

当時、県下12市に先駆けて、何故鈴鹿市の白子中学校と稲生小学校の2校が学校保健活動を取り上げたのか。これが長い間の私の疑問であった。

昨年私は、本学養護教諭コース2年生の卒業研究を担当するに当たり、テーマの一つに「鈴鹿市の養護教諭史」²⁾を取り上げた。それは、昭和17年に養護訓導の職

津＝橋内中の校内陸上競技大会は十九日午前九時から▲東橋内中の保健委員生徒三十名は十九日午後一時鈴鹿市白子中で同校委員と学校保健研究会▲藤水公民館は十九日午前八時同公民館で婦人学級、栄養料理の講習会、講師は土屋弥栄女史▲津保健所は二十四、五、六三日間午前九時同所二階ホールで栄養展示会、栄養食品約五百点を陳列

28. 9. 19 中部日本新聞

制が布かれてから丁度50周年に当たる記念すべき年であったからである。鈴鹿市もまた市制50周年を迎えており、奇しくも鈴鹿市と養護教諭の職制は同じ年に誕生したことになる。

私自身の養護教諭としての経歴は、この白子中学校において学校保健活動を学んだことに始まる。今、鈴鹿市内の本学にお世話になり、ここを最後の職場とするのも深いご縁である。そこで、鈴鹿市においてこの小、中学校が何故学校保健活動を県内で真先に取り上げて成果を挙げたかを解明し、鈴鹿市学校保健史の一角を明らかにしたいと考えた次第である。

2. 学校保健活動の曙

研究の初年度（平成3年度）の成果については、すでに発表したところである。²⁾ 本年度は、初年度で分からなかった昭和36年度以前の養護婦の配置状況から調査を開始した。その結果判明した養護教諭の配置数の変遷は下表に示す。なお、付図を参照されたい。

養護教諭の配置数の変遷

（鈴鹿市の小・中学校）

年 度	小 学 校			中 学 校		
	学校数 (校)	養護教諭数 (人)	配置率 (%)	学校数 (校)	養護教諭数 (人)	配置率 (%)
昭22	15	△ 1	7	8	△ 0	0
23	15	△ 2	13	8	△ 0	0
24	15	△ 2	13	6	△ 0	0
25	16	△11	69	6	△ 0	0
26	16	△15	94	6	△ 0	0
27	16	△15	94	6	△ 1	17
28	16	△15	94	6	△ 3	50
29	19	○△16	79	7	△ 4	57
30	19	△16	84	7	7	100
31	19	△17	89	7	7	100
32	21	△18	86	7	7	100
33	22	△20	91	7	7	100
34	22	△20	91	7	7	100
35	22	△20	91	7	7	100
36	24	○24	96	8	8	100
37	24	○24	96	8	8	100
38	24	○25	100	8	8	100
39	24	○25	100	8	8	100
40	26	△25	96	8	8	100
41	26	△25	96	8	8	100
42	25	○26	100	8	8	100
43	25	○26	100	8	8	100

年 度	小 学 校			中 学 校		
	学校数 (校)	養護教諭数 (人)	配置率 (%)	学校数 (校)	養護教諭数 (人)	配置率 (%)
44	25	○26	100	8	8	100
45	25	○26	100	8	8	100
46	25	○26	100	8	8	100
47	25	○26	100	8	8	100
48	25	○26	100	8	8	100
49	25	25	100	8	8	100
50	25	25	100	8	8	100
51	25	25	100	8	8	100
52	25	25	100	8	8	100
53	25	25	100	9	9	100
54	25	25	100	9	9	100
55	26	26	100	9	9	100
56	26	26	100	9	9	100
57	26	26	100	9	9	100
58	27	○28	100	9	9	100
59	28	○△27	96	10	10	100
60	29	○30	100	10	10	100
61	29	○30	100	10	10	100
62	29	○30	100	10	10	100
63	29	○30	100	10	10	100
平元	29	○30	100	10	10	100
2	29	○30	100	10	10	100
3	30	○31	100	10	10	100
4	30	○31	100	10	10	100

○…複数配置校あり

△…養護教諭未配置校あり

養護教諭の配置率は、現職養護教諭の方々や鈴鹿市教育委員会事務局から資料を提供して頂いた結果、昭和36年度以降は小学校・中学校とも、ほぼ100%であった。

小学校の学校数に対し養護教諭数が多いのは、複数配置がある為である。複数配置校は主に大規模校で養護学級のある学校ということがわかった。

このうち、本学卒業生（昭和46～平成4）で鈴鹿市の学校に勤務している人は21人であった。

鈴鹿市内の小・中学校分布図



○印 小学校30校

△印 中学校10校

白子地区学校保健委員会¹⁾

本年度はまず、鈴鹿市教育委員会を訪ね、倉庫に保管されている前年度未公開の昭和36年度以前の資料の公開を願い出たが、別の目的で既に調べられたところでは、当方の望む資料はなかったとの回答であった。

そこで、教育委員会の囑託でもあり、鈴鹿市の活字引と言われる元稲生小学校校長大井好定氏と、元同校養護婦であり、退職後本学講師として養護教諭コース育ての親でもある樋口律子氏のお二人に、鈴鹿市稲生公民館で当時の経緯を伺った。こうして次のことが明らかになった。

稲生小学校には、戦前の昭和7年頃から同13年頃にわたり、体育教育三羽鳥と言われた辻野武光、田辺保、後藤則夫の3教諭が次々と着任され、体育に力をいれてこられた。その結果、これらの卒業生を含めて校区一帯が、体育－健康に関心を持つに至った。戦後、昭和23年に後藤則夫校長、櫛田義照教諭が着任され、再び体育に力を入れ始め、さらに、昭和26年に岡崎秀一校長が健康教育に着目され、昭和27年健康優良学校に応募して県一となり、保健主事の櫛田教諭を中心として学校保健活動が積み重ねられていった。

また、昭和23年に白子中学校に着任された金子實校長は、昭和26年から保健主事稲本君美教諭、衛生主任稲川英夫教諭を中心として、保健教育の実験を開始された。これが、両校の学校保健活動の始まりである。

当時は、進駐軍司令部の助言により、文部省が編纂刊行した学校保健計画実施要領が、中学校へは昭和24年に、小学校へは昭和26年に示され、学校教育に参加しているすべての人々の組織的活動が重視されることとなり、新しい学校保健が出発することとなっていた。

そこで、学校保健の実験を始めるに当たり、文部省からは湯浅謹而氏、県教委からは坂盈氏等の指導者を招き、校区の保護者を交えて懇談の機会をもち、実験学校としてスタートすることの理解を得るために、学校側は随分苦勞されたようである。この校区には、すでに戦前から体育の指導が徹底しており、健康に対する関心も高かった。そこで新しい学校保健の考え方についての頭の切替えに多少時間がかかったものの、いざスタートとなると、保護者の熱意は徐々に盛り上がり、やがて地域ぐるみの学校保健活動へと高まっていくのである。

3. 稲生小学校

鈴鹿市の学校保健を語る時、最初から最後まで私の念頭にあるのは、この学校である。

昭和36年に日本一健康優良学校（小規模校）に選ばれ、全国にその名を知られてより見学者は跡を断たなかった。

昭和27年、三重県から初めて全日本健康優良学校審査（朝日新聞主催、文部省・厚生省後援）に応募して、初年度に三重県一健康優良学校に選ばれ、以来昭和28、29、30、31および32年と県一、そして同32年に初めて全日本健康優良学校特選校に選ばれたのである。さらに昭和33、34年も県一、34年に全日本特選校第一位に選ばれた。昭和35年には応募を一年休んで、日本一を目指し書類の整備を行った。

健康優良学校応募は実に煩雑な書類提出を要求され、まず書類選考で落とされることが多い。稲生小学校は、長年の審査の経験の上に他県の日本一の学校を参考として、ここで一旦提出書類の再整備を行ったのである。かくて翌昭和36年には県一はもとより、そして待望の日本一健康優良学校の栄冠をかち取り、三重県鈴鹿市稲生小学校はその名を全国に知られることになった。県一になってから実に10年目の快挙であった。すべて物事の成就には中心になる人物が存在するものである。稲生小学校は、昭和23年後藤則夫、26年岡崎秀一、29年草野善五郎、35年坂崎勝行、36年金丸直次という歴代のすぐれた校長のもと、昭和23年～37年まで15年の長きにわたって勤務された櫛田義照保健主事を中心に、「地域に立脚した健康教育」の研究実践を行った。

稲生地区は、鈴鹿市では人も知る裕福な穀倉地帯である。保健上の問題点としては、当時の農村では寄生虫、一般的にはトラホーム、地区としては、近親結婚が多いせいか他地区に比べ体格がやや小柄であった。櫛田氏は、「国語や算数では勝てないかも知れないが、健康教育で

なら稲生をひっくりかえして見よう」と、地域住民から信頼のある渥美学校医、岩崎学校歯科医の協力により保護者を啓蒙し、健康教育による問題解決学習を押し進めた。また、昭和33年7月には文部省から湯浅謹而氏を迎えて、「学校保健委員会と健康教育」の発表会、昭和34年9月には学校保健委員会の公開研究会を開催している。

初め静観していた鈴鹿市教育委員会も徐々に関心を持ち始め、昭和36年の日本一健康優良学校に選ばれる頃には、特別予算をプラスするなどの応援をするようになった。

津市橋北中学水難事件の起こった昭和29年夏以後、プールを造ろうという声が高まり、地域全体が力を合わせて資金集めを始めた。毎年地区の家庭から寄付してもらう「いも」を売って資金を作ったり、PTAが奉仕作業で大きな井戸を3つも掘り、交互にスイッチが入ってプールの水を満たすという画期的な方式を取り入れた。プールの完成は、昭和35年6月25日であった。当時、県下に三重郡川越町立川越小学校を除きプールを持つ学校はなかった。稲生小学校が採用した方式は、現在もプール造りの基本として採用されている。

この他、モデル水洗便所も造った。

こうして稲生小学校は、学校保健の名門校として、このあとも長く県下に名を残すのである。

4. 白子中学校

一方白子中学校は、何故「健康教育実験学校」に選ばれたのであろうか？

昭和25年、白子中学校校長は金子實氏であった。当時、県教育委員会教職員課で学校体育、学校保健を担当していた高橋俊男主事（後の指導主事）にとって、また、この年白子中学校に就職した稲本君美教諭にとっても、金子氏は神戸中学校（現在の神戸高校）時代の恩師である。

高橋主事は、昭和26年日本一健康優良学校に選ばれた名古屋市立米野小学校の審査を見学して、その席で、文部省の湯浅謹而氏から三重県にも健康教育の実験学校の拠点を作るよう指導を受けた。そこで、市川教職員課長に報告し、種々検討の結果、まず県庁所在地の津市に働きかけたが、受け入れられなかった。それならということで人脈を持つ依頼しやすい郷里の鈴鹿市で、かつ恩師が校長である白子中学校に白羽の矢を立てた。そして、稲本氏にこの新しい健康教育への実験¹⁾に取り組ませたのである。

この時、高橋主事も稲本教諭にしても全く手さぐりの出発であった。彼らは、しばしば学校に泊り込んで意見を闘わせ、時には県教委の坂氏も一緒に泊り込んで話し合った。保健委員会がどんな目的のもので、どんな任務を持ち、その性格がどんなものであるか。高橋主事以外誰一人知らない中で始めた実験学校であった。「全く暗中模索、試行錯誤の連続の中で、保健委員会の回を重ねるに従って一人歩きが出来るようになった」と稲本氏は回想しておられる。

まず、生徒保健委員会が軌道に乗り、子を思う親心からとでもいえる形で、学校保健委員会がついて来た、という感じで前進していった。白子中学校の保護者の三分の一は稲生小学校の保護者が占めており、この学区には健康教育に対する地域の理解が得やすい地盤がすでに出来

ていたことも、白子中学校にとって有利であった。

以下、年表的に出来事を追えば次のとおり。

26. 7.20 学校保健委員会結成

26.12.14 保健教育研究協議会

27. 3. 9 三重県保健教育研究協議会

26年度開催の学校保健委員会の回数は8回であった。³⁾

27年度に入ってから、毎月学校保健委員会が開催された。

27.11. 8 三重県学校保健優良校として表彰された。

27.12.13～14 三重県学校保健教育大会

昭和27年度の特徴は、学校内の保健衛生に止まることなく、家庭および一般地域住民との緊密な連絡協調を得るために、各種の地域別懇談会を開催していることである。そして、徐々に地区の協力も活発となり、且つ地域内の白子高校、白子、稲生、愛宕の各小学校の協力を得て、健康教育を中心とした「学校教育協議会」の結成にこぎつけた。

昭和32年10月17日白子地区学校保健委員会は、文部大臣表彰を受けるに至った。

しかし、この後一部職員の間新しい学校保健の在り方に疑問を持つ声が出て、「学校保健は生活統一の場であり、学校生活が身につについていけば、学業成績も上がっていくに違いない」という文部省湯浅謹而氏の説についていけなくなった。やがて、稲本保健主事は、白子地区の同志たちと袂を別って昭和33年津市へと転出する。

5. おわりに

昭和29年4月、私は三重県で初めての中学校養護教諭に任用され、津市から松阪市立鎌田中学校に移った。

松阪市立鎌田中学校は、白子中学校に2年遅れてではあるが、昭和28年度より3年間の計画で健康教育に取り組んでいた。そして、昭和30年11月25日、第3次の健康教育研究発表会を文部省湯浅謹而氏の指導のもとに開催し、さらに翌年1月、第一回の三重県学校保健大会を、白子中学校でなくこの鎌田中学校に於いて開いたのである。

稲生小学校は苦節10年、日本一健康優良学校への道を黙々と目指して歩んでいた。これに反して、白子中学校では、先述のように、先進派の稲本保健主事に対する一部職員の反発がおり、さらに金子實校長の去られた後の校長が、学校保健研究と高校進学の時同時取り組みに疑問を持たれるに至って、校内の意識に変化が見られるようになった。こうして、稲本氏が袂を別って転出する過程で、中学校の学校保健の本流が、鈴鹿市から松阪市へと移っていくのである。

なお、白子中学校には当時養護婦は採用されておらず、この学校に初代養護婦がおかれたのは、昭和29年5月1日のことであることを付記しておく。

本論文の作成にあたり、渥美三千里、稲本君美、大井好定、金丸直次、櫛田義照、坂盈、高橋俊男、樋口律子の諸先生、鈴鹿市教育委員会、山下健先生（金子實先生令息、現白子中学校長）はじめ鈴鹿市内30小、10中学校関係の多数の方々から資料を頂戴しました。記して深謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 三重県鈴鹿市立白子中学校：学校保健の研究 ―実験学校実践記録―， 1～24， 1952.
- 2) 大森幹子ほか：鈴鹿市の養護教諭史，養護教諭コース卒業研究集録（平成3年度）， 280～303， 1992.
- 3) 三重県鈴鹿市立白子中学校：保健委員会の歩み， 1～10， 1952.